

氏名	島津 俊之	
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	第5382号	
学位授与年月日	平成21年6月30日	
学位授与の要件	学位規則第4条第2項	
学位論文名	明治近代地理学誌研究	
論文審査委員	主査教授 水内 俊雄	副査 名誉教授 山野 正彦
	副査教授 山崎 孝史	副査教授 塚田 孝

### 論文内容の要旨

本論文では、地理的知識の収集・分析・生産・伝達行為としての広義の「地理学」が、明治近代においていかに多層的に分化し、各々の層がいかに相互に関連しつつ、どのような時空間的コンテキストのもとで展開していったのかを論じた。近代日本地理学史の先行研究では、帝国大学に起源をもつアカデミック地理学を中心軸に据え、その他の地理思想・実践を「前アカデミック地理学」などと有標化しつつ、地理学の展開を単線的な学史として叙述する傾向がみられた。本論文では、地理思想・実践の複数性と相互関連性、それらの展開の時空間性に着目し、ア priori な中心軸を設定しない複線的な叙述を行った。この叙述法に、時間的継起の叙述のみを含意する「地理学史」でなく、時空間的継起の叙述を含意する「地理学誌」の名を与えた。本論文は八章から構成される。第一章では、明治近代の地理学をアカデミック地理学・官庁地理学・民間地理学の三層構造と捉える「地理学の三層モデル」を呈示し、第二章以下で用いる方法論(対話的アプローチ・知の空間論・伝記書誌アプローチ)について議論した。第二章では、明治政府の地誌編纂事業の展開を、国土掌握・統合に関わる官庁地理学の営為と捉え、外的コンテキストとしての国民国家形成との関わりにおいて論じた。第三章では、地誌編纂事業における実務家レベルのキーパーソンである、河田 巖の地理思想・実践の展開について論じた。第四章では、実務家レベルの官庁地理学者から民間地理学者に転じた河井庫太郎に焦点を当て、地理思想・実践の展開を跡付けつつ、官庁地理学と民間地理学、そしてアカデミズムの三者の関わりについて論じた。第五章では、「郷土」の概念と、近世後期から一般化していたローカル地理教育の思想・実践が、公的地理教育制度の展開のなかでいかに接合し、そこに民間地理学やアカデミック地理学がいかに関与したかを論じた。第六章では、明治中期より熊野地方の風景写真を販売し、風景の観方を枠付けた久保写真館の実践を、民間地理学の一営為として昭和戦前期まで追跡して論じた。第七章では、アカデミック地理学の創始者の一人である小川琢治に焦点を当てた。小川の青少年期のライフパスを跡付け、アカデミック地理学への志向性がいかに形成されたかを知の空間との関わりで検討し、官庁地理学や民間地理学との接触について論じた。第八章では結論として、明治近代における地理学の三層(官庁地理学・アカデミック地理学・民間地理学)がいかに相互に関連しつつ展開していったのか、そこにキーパーソンズの地理思想・実践や、彼らを取りまく知の諸空間がいかに関与していたのかを、総体的な地理学誌として叙述した。

### 論文審査の結果の要旨

この論文は、わが国において、地理的知識の収集・分析・生産・伝達行為としての広義の「地理学」が極めて重視された時代とみられる、明治前半期に焦点を当て、当時の地理学が、大学や学・協会などアカデミックな組織から、官庁や民間など、非アカデミックな世界にいたるまで、いかに多層的に分化していたのかを示し、それらの各層が、如何に相互に関連しつつ、どのように、時間的、空間的に展開していたのかを、個別の新しい史実の発掘を積み重ねながら、解明しようとしたものである。これまでの日本地理学史に関する先行研究では、帝国大学の講座創設に起源を持つアカデミックな地理学の展開を中心軸に据え、その他の地理思想の実践主体を等閑視する傾向があったが、著者はその弊を指摘しつつ、特に内務省などの官庁における地理実践の展開を人物中心に克明に追い、各層の相互関連に目配りしながら、明治近代地理学の複線的な発達の様子を跡付けようとする

総じて本論文は、単線的な学史研究ではなく、最近の研究視角に刺激を受けた多層的な学史研究を志した意欲的業績であり、資料の詮索と史実の確定の手順を含め、著者の優れた学問研究の能力を示

すものである。本論文での考察を踏まえたうえで、アカデミック・官庁、民間という3層区分がどの程度妥当なものであるのかという点の再吟味があるいは必要であるかもしれないが、埋もれた在野の人物の活動を掘り起こした伝記的研究には、高い評価が与えられてしかるべきである。

言い換えればメインストリームと称される日本のアカデミズム地理学から漏れおちていた明治の地理学の知の発掘を、綿密な実証研究から明らかにするというその手続きと分析手法の手堅さ、また一次資料に徹底して当たったアプローチに関して、大変評価に値しよう。

知の空間論は果たして必要であったか。構築主義的な立場に立つようでありながら、中身はきわめて実証的研究であり、解釈に飛躍がありはしないか。また、官庁地理学と民間地理学、そしてアカデミズムの三者、官－民－学のトライアングルは明快な図式ではあるが、対象とした地理学の知の母集団がまだまだ不明であることもあり、今後も埋もれた在野の人物の活動を掘り起こす引き続き地道で手堅い研究が必要とされよう。

そうした課題も抱えつつ、その研究成果は高い評価が与えられるし、今後の研究の進展を通じて、さらなる結実が生まれるものと大いに期待を抱かせるものであった。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。